

オートクチュール ーパリ・モードの歴史

200781225 松本佐知子

目的

モードの国、フランスにとってオートクチュールは、フランスとは切り離すことのできない特殊性をもっているが、現代においてオートクチュールの存在は必要なのか

オートクチュールとは

- パリ・クチュール組合加盟店で注文により縫製されるオーダーメイド一点物の最高級仕立服
- 富裕層に最高級の仕立服を提供する職人的活
- シャルル＝フレデリック・ウォルトによって誕生

オートクチュールの役割

- モードの実験室

コレクションの傾向はここで試験されている

- 社会のトレンドを映す鏡

その時代からインスピレーションを得、またその社会に鏡を提供している

社会の奥底に沈んだ傾向を顕在化させる

例

- 第二次世界大戦後、クリスチャン・ディオールが「ニュー・ルック」発表

→戦後の記憶から逃れたいという
人々の切なる欲求

→女性が女性として見られたいと
願った



ディオール 1947年春夏オートクチュールコレクション

© Associations Willy Maywald ADAGP, 2020

例

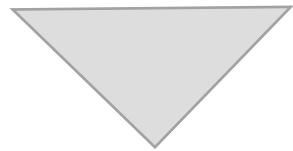
- また、乳房があらわになるシースルーのブラウスをマヌカンに着せて発表
 - 男女平等、慣習からの解放という支持を表明
- 1984年、ジャン＝ポール・ゴルチエが「オム・オブジェ (対象としての男性)」をテーマにコレクションを発表
 - 社会における男性の役割に関する考え方の変化
 - 性の平等

オートクチュールの誕生

- ・第二帝政期以前のモードは、貴族やその地位を引き継いだブルジョワジーといった、支配階級の人びとの専有物であった
- ・1791年、立憲議会によって同業者組合の廃止が決定
 - 宮廷は、モードへの影響力を失う

オートクチュールの誕生

- 顧客自身が服に使用する生地や装飾品全てを用意し、仕立屋に持って行き、そこで仕立屋が顧客の注文に応じて流行などに従いながらデザインし生成



非効率

- イギリス人 シャルル＝フレデリック・ウォルト
- 「オートクチュール」システムのはじまり

両大戦間期

- 「狂乱の時代」1919-29年

オートクチュールが飛躍的な発展を見せた時期

(シャネル、ヴォオネ、ランヴァン、リュシアン・ルロン、ジャン・パトウ)

- 経済恐慌に見舞われた1930年代

(バレンシアガ、チャールズ・ジェームズ、エルザ・スキャパレリ、ニナ・リッチ、マダム・グレ)

1950年代

- 戦時中 顧客数が激減し、多くのメゾンが閉店
- 戦後、クリスチャンディオール「ニュー・ルック」によりフランスのクチュールは再生を果たした

現代

- 1980-1990年代、オートクチュールにとって印刷の時代
- 新しいメゾンの誕生
- 2000年代には、ジャン＝シャルル・ド・カステルバジャックがパリ・クチュール組合に加入
- また、「海外招待メンバー」、「ゲストメンバー」、「オブ」スケジュールで参加するデザイナーたちが新風を吹き込んだ

結論

オートクチュールの芸術は、
今後時代の変化に適応し、
女性の憧れとして存在し続ける。